

『能・ハムレット』初演台本(当口版)

Noh Hamlet in Japanese: Script Used for the Premiere

上田 邦義

UEDA Kuniyoshi

Abstract: The historic world premiere of *Noh Hamlet* in Japanese was staged at the sold-out Nihon University Casals Hall on 2nd of December, 2004 as the realization of Souseki NATSUME's suggestion in 1911: "Shakespearean verse would be enjoyably staged in Noh style." As the script used on that day is different from the one printed in *The Bulletin of the ISHCC* No. 4, I thought I should publicize the final version in this succeeding number. There are alterations in several respects, but the main theme is the same: Hamlet's "To be or not to be, is no longer the question", and the grave guards "Connect your life to the life of the Universe. This life and the after life are both real lives. Now I know the secrets of this life". I am not in the position of reviewing the play, but it has given me great pleasure that Master Mansaku NOMURA who accepted my earnest request to perform as the old cemetery super-intendent, not the grave digger, wrote me after the performance: "For me who expects some gentleness and tenderness in kyogen, this role has been a proper one."

Key words: Noh, *Hamlet*, Shakespeare, Souseki NATSUME,
Mansaku NOMURA, kyogen. 東西舞台芸術の融合 『能・ハムレット』
新作能 夏目漱石 野村万作 日本大学カザルスホール

平成十六年度日本大学学術研究助成によるプロジェクト『創作能・ハムレット』は計画通り、二〇〇四年十一月二日にお茶の水の日本大学カザルスホールで初演された。これまで『英語能・ハムレット』は一九八二年の初演以来、たびたび国内外で上演されてきたが、能楽師たちによる「日本語能・ハムレット」は文字通り世界初演であった。それはまた、明治四十四年に坪内逍遙の翻訳劇『ハムレット』を見た夏目漱石がそれを批判しシエイクスピア劇の「能翻案」を提唱した、その一つの実現でもあった。もっとも漱石の念

頭にあった『ハムレット』能翻案なるものが、果たしてこのよつなものであったか。これはもう一つ新たな問題である。筆者は、この台本の作者として、「シェイクスピア劇は詩劇である」とする漱石の意を体しながら、しかしさらに二十一世紀初頭の世界に生きる人間として、しかるべき新才能を企てんとしたのである。

さて、本『融合文化研究』第四号に、「日本語」能・ハムレット『初演台本（初稿）』を掲載した。それは当日全観客に配布されたのであるが、実際に初演当日用いられた台本はそれとかなりの異同があるので、「ここに」初演当年版」を掲載する。異同があるであろうことは、その時に予告したことである。すなわち、「公演までにはまだ三月の期間があり、その間の打合せ・稽古・申合わせを経て、初演当日までにこの台本がどのような進化または変貌を遂げておるか、予想したいところがある」と。

異同の詳細説明はここでは省くが、単純に冒頭のホレイシオの「名のり」のように、初稿発表以前の拙稿に戻った箇所もあれば、また野村万作師のアイ語りの部分のように、演者によって、よりアイ語りらしい語り口となり、内容的にもより優れたものとなった箇所もある。また、初稿以前の草案の段階から私の思い切った作風に、「必ずしも能の形式にとられる必要はない」とする梅若万三郎師のご理解もあって、さらにその後種々改良を試みた結果で、「中入り」前後のよつに、かなり大幅な改変を行い、しかし最終的には、地謡節付担当の八田達弥氏案でまとまった部分も多い。

さて、このように種々の異同はあるものの、当日用台本の基本テーマは初稿とまったく変わらない。ハムレットの「生死はもはや問うまでもなし」であり、老墓守の「この世も死後もほんとの命。宇宙の命につながるごと。この世の醍醐味わかってきたさ」である。もちろんこれは漱石の「即天去私」をわたしなりにアイ語りへ翻案したつもりのものである。

演出についてはほとんど毎回、西原舞台での稽古に立ち会われた梅若万三郎師に多くを負っているが、稽古場をカザルスホールへ移してからの観世栄夫師のさまざまなアドヴァイスも、ホールを生かした舞台造りや十字架の反射板使用などの提案を含め、大変貴重であった。その他演出上のこまごました点に関しては、八田氏を始め伊藤・加藤・長谷川氏その他梅若研能会の方々の提案・協力に負うところが大きい。パイプオルガン導入は能楽関係者は最初必ずしも賛成ではなかったが、大倉正之助氏と小生の強い意向に観世栄夫師はじめ大方のご賛同を得て実現した。これも一つのコラボレーションで、多くの方がこれを肯定的に受けとめてくださったことは、このホールでの公演を提案した者として満足し

ている。

この公演の評価についてはここで云々すべきでないが、私の願いを聞き入れて老墓守を演じてくださった野村万作師から、公演後「狂言の中に、優しさ、柔らかさを望んでいる自分として適当な役どころであったように思っております」とのお便りをいただいたことは、作者としては無上の喜びであったことをここに記させていたいただきたい。

なお、この公演に関する新聞報道や批評などは、国際融合文化学会のホームページ

<http://atlantic.gssc.nihon-u.ac.jp/~ISHCC/>

および筆者のホームページ

<http://atlantic.gssc.nihon-u.ac.jp/~ueda/>

を参照していただきたい。

以下、実施状況を記録し、当日の台本を掲載する。

実施状況

プロジェクト、「東西舞台芸術の異文化融合先端研究」創作能・ハムレット」

日本大学カザルスホール上演

日 時：二〇〇四年十二月二日

午後六時半開場 七時五分開演 八時四十五分終演

場 所：日本大学カザルスホール（東京御茶ノ水）

研究者代表：上田邦義（大学院総合社会情報研究科教授）

研究メンバー：小笠原隆夫（芸術学部映画学科教授）

佐藤三武朗（国際関係学部長）

関谷武史（文理学部教授）

田中徳一（国際関係学学部教授）

藤崎周平（芸術学部演劇学科助教）

丸茂祐佳（芸術学部演劇学科助教）

研究協力者：美術・沼田憲平（芸術学部演劇学科教授）

照明・大久保恵児（芸術学部演劇学科専任講師）

パイプオルガン・原田靖子

ポスター・チラシ等デザイン・戸村知子

印刷・株式会社ニシガイ

事務局・安田保・吹田響子

ビデオ撮影・竹内正人・渡部英雄

監修・梅若万三郎

作・上田邦義

演出・観世栄夫・梅若万三郎・上田邦義

囃子統括・大倉正之助 地謡節付け・八田達弥

解説・上田邦義

出演・里人(前場) 伊藤嘉章

ハムレット(後場) 伊藤嘉章

オフィーリア 長谷川晴彦

ホレイシオ 加藤真悟

老墓守 野村万作

囃子笛 槻宅聡

小鼓 古賀裕己

大鼓 大倉正之助

太鼓 三島卓

後見・中村裕・梅若紀長

地謡・青木一郎・八田達弥・梅若泰志・古室知也・青木健一・中村政裕

能 ハムレット

上田邦義 作

十二月二日上演当日版

里人（前）・・・伊藤嘉章 面〓若男、喝喰鬘、白練、黒水衣、濃茶大口、

緞子腰帶、扇。

（墓守を連想させるため、またハムレットが父王のために着ていた喪服を連想させ、また亡きオフィリアに哀悼を捧げ続けている事を連想させるため黒色の水衣を着る。）

ハムレット（後）・・・伊藤嘉章 面〓若男、喝喰鬘、冠、厚板、白地単狩衣、大口、

縫紋腰帶、剣、扇、宝珠。

オフィリア（前）・・・長谷川晴彦 宮内長官の娘、ハムレットの恋人。小面、鬘、

摺箔、金地水衣、縫箔腰巻、胴箔腰帶、胴箔鬘帯、扇。

オフィリア（後）・・・長谷川晴彦 浄化された姿。長絹、天冠（花挿）、扇。

ホレイシオ・・・加藤眞悟 ハムレットの親友・学者。角帽子（頂部を折込む）、

段熨斗貝、掛直垂、白大口、縫紋腰帶、経巻、扇。

老墓守リ・・・野村万作 唐人の役のような扮装。側次袴、竹杖。

囃子・・・笛 榎毛聡

小鼓 古賀裕己

大鼓 大倉止之助

太鼓 三島卓

後見・・・中村裕 ほか

地謡・・・青木一郎 ほか

パイプオルガン・・・原田靖子

能ハムレット

前場

座付き、冒頭に大鼓とパイプオルガンの演奏あり

〔名宣笛〕但し中之高音・六ノ下のみ吹く

名ノリ ホレイシオ「これはホレイシオと申す者にて候。さても ハムレット殿下みまかりてのぞ。
我は殿下の御遺言にまかせ。かやうに諸国を巡り殿下の御事語り伝へ候。しかれども我
は心に悔やむ事あり。君御胸騒ぎを覚え給ひしに。我フエンシマの御試合をとめ得ず御
命を失ひ給ひし事。返すがすも無念の次第にて候。久しくデンマークに立ち帰らず候程に。
殿下の御菩提をも申し。またオフリーリヤ姫の御墓所をも詣りてはばいと存じ候。

「急ぎ候はば、一たびはばも姫君の御墓所に着きて候。心静かに御弔ひ申さばいと存じ候

正中に座して語り

サシヨクク 北政なる。わがマンマークの馬々にも。春日やつちやく訪れて。風になびきて美し
く。董 校草 金鳳花。咲き乱るを眺むれば。姫君の御姿思ひ出ださるなり。かの人の
野辺送りには。王妃も花を御手向けあへ。

カカルラうつき人に美しき花をこそ言ひても。この所よの事なるべし

下歌「昔語りの跡訪ひは。殿下が今のは言の葉に。われを思はば後までき。わが物語を伝へて。懐
かしき思ひかな。君懐かしき思ひかな

下歌のトメに経巻を左手に持ち脇座へ行き着座

次第「段なし」打出のトメに「ハム」静かめり

次第 ヨクノ里人 生死の道に迷ひ来て。生死の道に迷ひ来て。憂き世に光もとのぞ 〔地取〕
サシ「いれが氣高き心なる。残忍非道の世に耐えて生くる。あるには昔古難の海に立ち向かひ。
その息の根をとめぬか。生来受けし苦しみを。よし断ち切れぬ。ものなれば。この上もな
き。最期なり 〔打切〕

上歌「死ぬるは。眠るがよきものなや 〔打切〕 眠るがよきものなや。眠れば夢を見ぬま
のぞ。いかなる夢を見るやらん。 夢にたひびて帰らぬ国なれば。かくて優柔不断となり。
行ひの舌を失ひぬ。生くる事とは何やらん。 死する事とは何やらん

ホレ不思議やな我ならしは。姫の御墓所に詣り給ふ。御身は如何なる人にて渡り候ぞ

里人「わはば。の里に住む者に候が。オフリーリヤ姫みまかりてのぞ。かの姫を悼みかやうに御

墓所を弔ひ参らせ候。1万の候ハノ野辺になへて重の咲き乱れたるを。これは「き人の
る」の花ト云候

ホレけけけに可憐なる重の今を盛りと咲き乱れたるが。かの姫君のいるこの花とほ。いかなる
謂はれに云候ぞ。

里人「ちよ候かの姫野辺送りの御時。姫君の兄トマツイン悲しみ給ひ御申しありしは。君れ
よりは重となるべし。重の花言葉は真心なればなりと。

カカル「ヨク」それより巡る春毎に。かちつに重の咲き乱れ候。

下歌 地謡思ひ出せば痛はこせ。その「ヨク」ハ清らら。今は「野」すみれ草。手向けの

花かオフリーリア。一葉草ニ夜草。再び見えぬ想こそや

語 里人「かの姫の思ひ人ハムレト。おのが生死に思ひ悩みありけるが。父の「霊現れ給ひ。

我が仇を討ち取れと命じ給ふ。適はして思ひ給ふが。覚悟を定め女ト向かひ。君尼寺入
行き給ふ言つけせ。

カカル「ヨク」姫はあまりの悲しきに。狂気となりてただ一人。花輪を抱きて誘はれ行くや。

春の小川に踏み誤り。しばしは人魚のとくにて。水面に浮かみ歌口をさみしが。やがて
水底にはなぐも。ひらけ見えぬなり給ひけり

ホレ詞「け」舞はこき御物語 尼寺行けと仰せありしは。ちよは御心変わり給ひける
か

里人「ちよかの人はオフリーリアを真に愛したれば。罪人となるべき御身の行く末を思ひ。清らに
暮らせよの謂ひなりしが

カカル「ヨク」ホレ姫のむなしくなり給ひ。それを「夢」にも知らずして。流されたりしインダ
ランドより。帰りに見れば野辺の送り。里人詞「かの墓」に飛び込み今一度

カカル「ヨク」その面影を抱きこめさ。幾千万の只あな。我が愛くしは「勝」るま
じ

地 拍合「ちよ」のむしかの敵。我を狂気とあやけりて。墓より出だせとのいねは。抱きこ事も叶
せん。引も離れなむ。「夢」の「世」を。去りこめま。思ひは残して置まつけ
ん。悲しき。切

抑今君。寂しさに耐えかねて。水の面に。その身を投げけるが。許し給ふフリーリア。ゆゑに
給ゆオフリーリア

笛アシライを吹く（大小は不打）（里人は扇を腰に挿し坐禅の態にて下に居る）。

オフリーリア静かに出る。オフリーリア舞台の後方にて正へ向き止まる頃、笛吹き

止める。

それより地謡は左記の上歌を謡つ(ただし拍不合にて。オフィーリアの言葉とも天の啓示とも聞こえるように。大小は打たず)。

オフィーリア、里人の後方に立ち、ついで里人の左後に近づき静かに止まるとき、笛のみ再びアシライを吹く(地謡の上歌にかぶせて吹きかける)。

オフィーリアは片手を里人の方にかざしてハムレットとの和解を示す。

里人は向き直りオフィーリアと向き合い、やがてオフィーリアは立ち去る。

里人はオフィーリアのあとを見送り、扇を抜き持ち正面に向き(このところまで地謡いっばいに型を仕る)。「生死はと謡い出す。

(高く澄んだ調子で静かに)

地謡列の謡つ(月夕川の面に、結ぶ水のみどり。数々の花は、水面に散り浮きて、)れより地謡全員にて謡つ(調り和え融け合ひて、あらたなる世に生まれ来る。美しき思ひ美しき言葉。志高ければ、そのき人は進化せり。万人の命輝く、諸共に生くる理

拍合 里人のうた、生死はもはや。問ふまでもなし。地、生死はもはや。問ふまでもなし。今か後に、春花のもと。秋月の宵。雀の二羽の天より落し。これみなあまねく。摂理たるべし。この世に、この世に偶然なく

ル里人 前兆あれば、気づくべし。地、過去も未来も。今こゝに、覚悟がすべて。里人、今この時に

拍合 命懸くべし。地、有限、無限。夢幻幽玄。前世も来世も。すべてこの世に、生かし悟りて。悟り、生きてこの世の命を生くべきなり

大鼓一調にて送りアシライ

「中入り」

老蔓守のアイ語り

間狂言詞章

若い頃は恋もした。

甘いまま恋もした。

とんけりやうな恋もした。

年はやいしても、気持ちは、いとも青海原。

「江戸の羅漢味わなへし来たれ」

「江戸一ノ 江戸雖然はなご」

「おし因縁はなごのうぢ」

「おはのうぢはなごのうぢ」

「江戸の羅漢味わなへし来たれ」

「江戸一ノ 江戸雖然はなご」

「おし因縁はなごのうぢ」

「江戸の羅漢味わなへし来たれ 江戸雖然はなご 江戸一ノ 江戸雖然はなご」
江戸の羅漢味わなへし来たれ 江戸一ノ 江戸雖然はなご 江戸一ノ 江戸雖然はなご
江戸の羅漢味わなへし来たれ 江戸一ノ 江戸雖然はなご 江戸一ノ 江戸雖然はなご
江戸の羅漢味わなへし来たれ 江戸一ノ 江戸雖然はなご 江戸一ノ 江戸雖然はなご

江戸の羅漢味わなへし来たれ 江戸一ノ 江戸雖然はなご 江戸一ノ 江戸雖然はなご
江戸の羅漢味わなへし来たれ 江戸一ノ 江戸雖然はなご 江戸一ノ 江戸雖然はなご
江戸の羅漢味わなへし来たれ 江戸一ノ 江戸雖然はなご 江戸一ノ 江戸雖然はなご
江戸の羅漢味わなへし来たれ 江戸一ノ 江戸雖然はなご 江戸一ノ 江戸雖然はなご

「江戸の羅漢味わなへし来たれ」
「江戸一ノ 江戸雖然はなご」
「おし因縁はなごのうぢ」
「おはのうぢはなごのうぢ」
「江戸の羅漢味わなへし来たれ」
「江戸一ノ 江戸雖然はなご」
「おし因縁はなごのうぢ」
「おはのうぢはなごのうぢ」

後場

江戸の羅漢味わなへし来たれ 江戸一ノ 江戸雖然はなご 江戸一ノ 江戸雖然はなご
江戸の羅漢味わなへし来たれ 江戸一ノ 江戸雖然はなご 江戸一ノ 江戸雖然はなご
江戸の羅漢味わなへし来たれ 江戸一ノ 江戸雖然はなご 江戸一ノ 江戸雖然はなご
江戸の羅漢味わなへし来たれ 江戸一ノ 江戸雖然はなご 江戸一ノ 江戸雖然はなご

サシの川にオフィーリアたゞ死にたれに現れたるは川の流れた身を洗めて。この世を去りし。オフィーリアなり。我が思ひ人に契り絶えなん事を悲しみこの世を去りしはかなさは我が身ながらもあはれなり。されどもかの人現れて。とも浮かみし春の空。眞の愛に包まれり
一セイヤ浮かみ得ぬ身とて沈みし川面に。今照り添ふや。春の月

カカルヨウホレ月澄み渡る川の面に。浮かみ出でたる人影を見れば。まさきオフィーリア姫
にましますか。さては嬉しや御身ははな。殿下のみもとに参りたるぞ。さりながら我は殿
下の最期を。思ふに付けて今もなお。心痛みて悔むなり

ハムレット 語いながら現れる

カカルのヨウハム公過ぎたる夢よホレイシオ。生死はもはや問ふに及ばず。君自らを救ひ給へ
ホレ生死は問ふまでもあらずは。なほは善の御心やいがた
公公(我オフィーリア姫の救しを得。とも生死の海を渡りて
カカルのヨウ光の園にまじりつゝまことの愛を悟り得たり
ハム公それまことの愛を問ふならば精神進化の兆しあり

ハム公地今みな人は世界の市民。広きまなざし。たかきこころ。イロ十早舞

イロエ 刻打行(ハムレット、オフィーリアに宝珠(生命・平和の象徴)を渡し、
オフィーリアはそれを持ちホレイシオの前に行き下居。宝珠をホレイシオ
に渡す。それよりオフィーリアは懐中の扇を掲げ正中に行き正へ向くとこ
ろ太鼓上げ、打切より早舞の初段となる。

早舞 初段より打つ(オフィーリアが初段目を舞い、二段目よりハムレットが舞
い続く)。二段目地頭アトおよび三段目を一管ずつ詰める。トメコイ合

ワカハム公ヨク幸せに。またるものなし。諸人の

地寿福増長 還齡延年を。祈るなり

ハム公心を語り 地心を語り。ことばを行ひ争はず。最期の仕上げは天命なりと
ノメ合 公公あては静寂

地あては静寂。しま。気たかきこころが飛び立たねる。靈魂世界にお休みなさい。こころはこの王
子よ。もう語らねぬ。天使の飛翔と歌声に。いとなはれ導かれ。天使の飛翔と歌声に。いとな
はれ導かれて。安息世界に入り給ふ。安息世界に入り給ふ